

科目名：造形表現 (必修1単位)		担当教員名：佐藤鷹通	使用テキスト：出版社名・テキスト名	
		担当形態：単独	保育内容 領域 表現 日々わくわく生きる子どもの表現（わかば社）	
科目	領域及び保育内容の指導法に関する科目	施行規則に定める科目区分又は事項等		領域に関する専門的事項 表現
授業の到達目標及びテーマ： 幼児の表現の姿や、その発達を理解する。造形表現の基礎的な知識・技能を学ぶことを通し、幼児の表現を支えるための感性を豊かにする。				
授業の概要： 幼児期の表現の特性やそれを受け止めていくことの重要性、幼児の遊びや生活の中に見られる素朴な表現に関し、具体的事例を通し、また学生が実際に体験することを通して幼児の世界に関心を持つようにする。自然、生活、文化における様々な表現に触れ、そこで感じたことを他者と共有する機会を設ける。季節や行事、伝統芸能、文化財、文化的活動、伝承遊びなどを学生自身が体験し感性を豊かにする。				
回	項 目	内 容		
1	領域「表現」の捉え方	3歳以上と3歳未満の子どもの表現の違いを理解し、表現とは感性と知性の間にあるものであることを学ぶ。幼児教育は環境を通して行うものであることを理解し、環境を構成する保育者の役割について事例を通して学ぶ。		
2	子どもの発達と描画・造形表現—発達の流れ	音楽表現や身体表現と造形表現の違いは、自分の行為の結果が目に見えて残るということを理解する。子どもの描画や造形は、描画期→前図式期→図式期という発達の時期に応じてそれぞれ特徴をもつことを理解する。発達の流れは心身の発達に伴う意図性の高まりであり、それが自身の出来栄への評価を生みだすことを実際の子どもの描画・造形を鑑賞することによって学ぶ。		
3	子どもの発達と描画・造形表現—感覚的な楽しさ	子どもが小麦粉粘土などの素材と関わる事例、なぞなぞでお絵描きをする事例、ペンギンを描く事例を通して、子どもが発達に応じて感覚的な楽しさからイメージを描き表す喜びへと発展していくことを学ぶ。子どもの感覚的なリズムが、生き生きとした作品を作る原動力であることを理解する。		
4	子どもの発達と描画・造形表現—イメージを描き表す喜び	ものの名前を覚え、出来事を言葉で表現できるようになると、子どもの世界は広がり、物事がよく見えるようになり、それを表現することに喜びを感じ始める。そのことを5歳児の生き物（カナヘビ）を描いた事例を通して学ぶ。子どもはアニメの世界に生きていることから、見えているものに見えないものを自然に重ねるといった表現の仕方があり、保育者はその表現を大切にすべきであることを理解する。実際に学生自身も生き物の水彩画を描いてみる。		
5	遊びが生み出す学び—遊びの手段としての表現	粘土、積み木、廃材製作などの造形活動が、「ごっこ遊び」と深く結びついていることを事例を通して学ぶ。描画の線は消せないのに対し、粘土や積み木はいくらでも作り変えることができるので、失敗を超えた試行錯誤を生み出せるので子どもたちに好まれることを理解する。保育者が遊び場面の描画や造形に同じ遊び手として関わる時は、正しきや望ましさから解放され、保育者自身が共に楽しむ存在となることが子どもの表現を豊かにすることを学ぶ。		
6	子どもの苦手意識を導くもの	事例を通して、感覚と表現の間に、「見る」という知性の働きを忍び込ませることの重要性を学ぶ。子どもが苦手意識を持つ要因として「描画材の扱い、描き方、手順、プランニングの問題」があることを理解し、子どもたちの経験の質と蓄積が重要な意味を持つてくること、つまり、各園の文化が重要な意味を持つてくることを学ぶ。製作をしている子どもの手や顔の写真から、学生が何を感じ取れるかをレポートにまとめる。		
7	体験が生む描画・造形	2歳児の表現では、感覚的なおもしろさが結果的に作品につながるような環境構成が必要であること		

	— 2 歳児の表現	を学ぶ。2 歳児の作品作りには体験から得た感動を背景に、作品となって子どもにフィードバックしていくような教材研究の工夫が求められることを学ぶ。2 歳児のカタツムリ製作をどのように行うかを学生が考え、実際に作る。
8	体験が生む描画・造形 — 3 歳児の表現	3 歳児は、一つのものに素直に集中でき、アニミズムの時代特有の共感性を持ち、その対象に心を寄せていくことができることを学ぶ。お話絵本や写真絵本も興味のある部位を確認するのに大きな力を発揮することを理解する。3 歳児では、まだものともとの関係を計画的に一つの画面上に描いていくことができないので、教材の工夫が必要であることを学ぶ。学生が紙粘土でカタツムリを実際に作り色付けをし、自然物などで装飾する。
9	体験が生む描画・造形 — 3 歳児の表現	学生が写真を参考に「ダンゴムシと葉っぱ」、「木とカブトムシ」を完成させ、描画の作品に造形的要素を取り入れることを学ぶ。
10	体験が生む描画・造形 — 4 歳児の表現	4 歳児では、ものの見方に広がりや深まり、つながりが見えてくることや、アニミズムも残しており独特の表現が現れることを学ぶ。「虫」をテーマにした作品展に向かう子どもたちの事例を通して、現代の子どもたちに望まれるのは豊かな体験であることを理解する。図鑑を利用して実際に学生が昆虫をオイルパステルや絵の具で描く。
11	体験が生む描画・造形 — 5 歳児の表現	5 歳児では、見出したことをリアルに表現したいという意欲が湧き出、見えるものへのこだわりが際立つことを学ぶ。グループで作る協同作品では、何気ない保育者の導きや段階的な機会の提供が大切であることを事例を通して理解する。5 歳児の造形表現として取り入れる版画の自画像を学生自身が作る。
12	体験が生む描画・造形 — 5 歳児の表現	前回の自画像の版画を仕上げ、それぞれの作品を鑑賞し、展示する。
13	体験が生む描画・造形 — 5 歳児の表現	協同作品として学生が 2 人 1 組になり、それぞれポーズをとった時の体の動きに着目して、モールとストローで人形を作る。
14	体験が生む描画・造形 — 5 歳児の表現	形のないものを表現するという視点から、学生が「心の色」というテーマで抽象画を絵の具を使って描く。イメージや感覚に寄った表現によって「うまく描ける」ということから子どもたちが解放されることを、学生自身が実感し理解する。
15	子どもの表現と保育者の援助	子どもを表現へと導く保育者の援助として大切なことは、保育者自身が「表現すること」を楽しんで見せることであり、そのためには保育者自身の経験が大切であることを学ぶ。一人ひとりが必要とする援助を見極め、子どもの心が動き出す瞬間を機敏に捉え、「ここだ」と思える時まで待つこと、そのためには深い子ども理解が必要であることを理解する。
	期末試験は実施しない	
<p>参考書・参考資料：</p> <p>幼稚園教育要領 幼保連携型認定こども園教育・保育要領 保育所保育指針 (平成 29 年 3 月告示)</p> <p>季節の製作あそびとプレゼント工作 (成美堂出版)</p>		
<p>学生に対する評価方法：</p> <p>課題等の総合評価。</p>		